

# 日本語英国教会ニュースレター

第91号 2017年11月発行

## パウロとバルナバ 3

司祭 竹内謙太郎

改めてパウロが新約聖書に登場するときの様子を思い起こしていただきたいと思います。彼は先ずクリスチャンに対する迫害の指導者として私たちの前に登場します。ステパノという人物が迫害され石打の刑によって殺された時にその死刑を監督していたのがパウロその人でした。そして迫害をさらに組織的に拡大し、エルサレムに止まらず、アンテオケまでに行動を拡大していく先導者でした。

使徒言行録によれば、パウロの回心はその迫害旅行の際に起こったと言います。極めて象徴的な物語が記されています。それは激しい衝撃と共に彼の目が一時失明状態となったとあります。主イエスの声を聴き、初めてそこで目が見えるようになったと記されていますが、ここにも聖書特有のシンボリズムが示されています。すなわち、主イエスの声を聴き、主イエスの声に従うときに、私たちはすべての事柄の本質を理解することが出来るようになるという象徴的な物語です。

聖書は随所にこのような象徴的な物語を私たちに残してくれていますが、パウロに起こったこの奇跡と言える物語は、そのような記録の中でも最も心打たれるものと言えるでしょう。一人の人が完全にこれまでの行動から解放されて、以前とは全く反対の方向にしっかりと向くようになったと言うことです。パウロに起こったことは、私たちにとっても他人事ではありません。つまり、主イエスと確かに出会ったとするならば、私たちが他者を、また世界を見る目に大きな変化が起こるのであろうというメッセージだからです。これまで何となく見過ごしてきたようなことが、実はとても大切なこととなってくるのです。さらに、これまで私たちの心に取り付い

てきた様々なことが、それほど重要な事には見えてこなくなると言ったような大きな変化が私たちの中に起こってくると言うことなのです。

改めて、ここで皆さんに申し上げておきたいことは、このような物語が、何か他人事の記録としてではなく、実は私たち自身に起こることなのだ、聖書は言外に強調しているという聖書特有の提案と言ってよいのではないかと思います。皆さんが聖書をお読みになるとき、そこに登場してくる人たちにご自分を投映させて下さるようお願いしたいのです。誰か他の人の物語ではなく、私たち自身の物語として読んで頂きたいと思います。それが聖書を私たちに伝えてくれて来た無数の人達の思いであり願いなのです。

さて、新約聖書はパウロの伝道宣教の華々しい物語を詳細に伝えておりますが、パウロをキリスト教会に紹介し、受け入れる世に尽力したバルナバについては、ほとんど詳細は判っておりません。ここで古代文書を読み解く訓練を受けた者として、しばらく小生の推論にお付き合いくださるようお願いいたします。

キリスト教会迫害者として、パウロはユダヤ教社会の指導者の一人でありました。クリスチャンにとって最も恐ろしいこの人物に勇敢にも接触した人がバルナバなのです、と申しましたら、皆さんはどのようにお感じになるでしょうか。敵の中の最大の敵にあえて接触する、ということは極めて危険であると同時に現在でも十分に理解できる底知れない勇気がそこにはあったと言うことではないでしょうか。迫害の牽引者、指導者、そして厳しい迫害実行者と接触することはどれほど恐ろしいことかよく判ります。正直に言って小生にそのような勇気があるかどうか危ないものです。しかし、彼はその接触を勇敢に行いました。私たち自身、彼の主イエスに対する深い信仰に圧倒されます。主イエスご自身はご自分を十字架刑にしようとする人たちの前に臆せず立たれました。バルナバの思いも姿勢もそのような主イエスに従う者としての姿勢そのものであったと、私は確認します。パウロは単に

バルナバに説得されたのではないと言えるでしょう。むしろ、バルナバの勇氣に、それも信仰的な勇氣にたじろいだのではないかと思っています。そこでは、自分のユダヤ教における信仰指導者という自負が打倒されたことに気付いたのではないのでしょうか。そうでなければ、その後、バルナバと共に旅をするなどということは決して起こる筈もなかったでしょう。新約聖書はこのバルナバの信仰における勇氣を詳細に記録してはいません。ただ、古文書の記録理解という学問的理解がなされるとこのような結果になるのではないかと信じるのです。パウロの書簡、使徒言行録などでのパウロの活躍の陰に隠れて、バルナバは使徒言行録でも殆ど登場しませんが、実はキリスト教会の歴史において、私はバルナバの存在はより以上に強調されても良いのではないかと思っています。

キリスト教会は信仰という事の中で、「和解」の重要性を述べています。和解とは共に一つとなろうという重要な姿勢を意味します。単に仲良くなろうと言ったような単純なことではなく、互いに心底から一体となろうという強い意志を示すキリスト教用語です。私はキリスト教会の歴史そして多くの和解の実践者を知っていますが、バルナバこそが歴史上主イエスに次いで最も強力な和解の実践者だと思っています。そして私たちは、彼の信仰的行為がすべての人を生かし、その存在の重要性を明らかにする事となる、と知るようになったのだと考えています。

#### ◆◆◆◆◆ 前回の報告 ◆◆◆◆◆

教会の暦上11月1日は **All Saint Day** 諸聖徒日ですので、子供達と共に「**Saint**」について学びました。St Martin's 教会内には **Saint** が描かれた、とても美しいステンドグラスがあります。それぞれの聖徒にはそれぞれのシンボルも描かれています。アッシジの聖フランシスには、羊や鳥、聖セシリアには音符。聖マルチン (**Saint Martin of Tours** マルティヌスあるいはツールのマルチノは、物乞いに自分のマントを二つに裂い

て与えたと言われていますので、マントの布が描かれています。Saint とは広義の解釈では、神様を信じて世を去った人で私達それぞれも Saint になり得るのです。工作では「聖マルチンは子供たちの友達、貧しい人々をまもる聖人」として覚えて紙のランタンを作りました。



### 礼拝中の学び分かち合いから

フィリピの信徒への手紙は、パウロが囚われて獄中にいた時に書いた手紙です。他に獄中書簡として言われているのは、エフェソ、コロサイ、フィレモンの手紙があります。フィリピ1章30節では、パウロが苦しんでいるように、フィリピの信徒も苦難に直面しなければならないが、苦難を恐れるべきではないとパウロは励ましています。獄中であって「Rejoice—喜ぼう」というパウロです。クリスチャンの喜びとは、地上にあるどんなものにもまさる。なぜならば、クリスチャンの喜びとは、キリストと共に在るということに基づいている。イエス様を失うことがないから喜んでいると言っています。

福音書の朗読箇所はマタイ22章1節から14節「婚宴のたとえ」でした。このたとえ話は、書かれた背景も含めて広い視野で見た方がいい箇所です。イエス様がこの世に来られた時、イエス様に従って受け入れるように招かれたにも関わらず、侮辱し招きを退けた人々が聴衆の中にいました。神様の招きとは婚宴にまさる喜ばしいことです。招きを自分たちの所用の為に拒んだ人々に、本当に大切なことを忘れてはいませんかとイエス様は問いかけています。婚宴に呼ばれて来なかった人々には、せつかく用意してある喜びを味わうことができないのは誠に惜しい。なぜならば最も大切なことを見落とすことになるからです。たとえ話の中で「礼服」を取

り上げて、本来ならば人々の為に神様に仕えるべき祭司長やラビに、神様に呼ばれる為の準備をいつも怠らないようにイエス様は語っています。

私たちも、祈りのうちに、自らを振り返り、心を整え、礼拝にのぞむ姿勢を持って、私達の集まりが、神様の招きを心に覚えて、神様と共に在る喜びを分かち合う場となりますよう祈っています。

ジョンソン友紀



### Pilgrim Course から

今年夏からご希望の方々と共に、上記のコースに従って勉強会を礼拝前、そして個人宅でそれぞれ行っています。本は英語ですが、日本語解釈を入れてジャッキーさんと共に行っています。身近な表現がされて分かりやすく学べます。二回目の「父なる神」の中に、人の家族関係で表現すると、問題を抱えている家族関係のある方にとっては理解しにくいけれど、神様の愛とは私たちに与えられた表現や想像以上のものがあることを覚えていたいとありました。幼児さんがヨチヨチ歩き始めている時にいつでも支えられるように手を広げている父のような神という表現は旧約のホセア書 11 : 1-4に見られます。毎回新鮮な発見があって興味深い学びになっています。ご興味ある方はいつでも参加可能ですのでお知らせください。このコースは洗礼を強要するコースではありませんが、洗礼希望の方には洗礼式の相談を受けますので、ご遠慮なく申し出てください。



11月14日

セントポール大聖堂でも Circle of Prayer として、年間を通してロンドン教区にある教会と教会活動それぞれを順繰りに日々の礼拝の中で覚えて祈りが捧げられます。毎年一回美しいカードと共に祈りが捧げられるお知らせが送られてきます。

セントポール大聖堂での週日礼拝は朝8時と12時半の聖餐式そして午後5時の Evensong があります。昨年も有志の方々と共に参加しましたので、今年も Evensong に参加出席する予定ですので、一緒に礼拝に参加できそうな方は ご連絡ください。



**12月3日 St Martin's クリスマスバザー**  
**12時から午後3時まで**

お手伝いできそうな方はお知らせください。また、当日のバザーへの献品がありましたら、11月19日の集まりか、あるいは事前にお知らせをくださって当日持ち込みでも可能です。皆様のご協力をお願いいたします。

**12月17日 日本語英国教会クリスマス**

例年12月は集まりをしていませんが、今年は子供達と共に有志による誕生劇、クリスマスキャロルを歌い、礼拝を捧げたいと思っております。また有志による特別な持ち寄りも計画しておりますので、ご予約に入れてください。

**日本語英国教会 St Martin's West Acton**

**11月19日（日曜日）**

午後3時から 5時まで

夕の礼拝

ティータイム

場所：St. Martin's,

Hale Gardens, LONDON W3 9SQ

皆様、お誘いあわせの上いらしてください。

Commissioned Lay Minister：ジョンソン友紀  
120 Carthorse Lane REDDITCH B97 6SZ  
携帯 07503 893880  
yukifunakawa@btinternet.com  
ブログ <http://blog.goo.ne.jp/jacuk>